

日本IT書紀

134 産業の意志

08 宣試篇
卷之十九 先驅

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第三百二十四

産業の意志

一

前節の続き。

第二次大戦のあと、日本の産業が初めて「意志」を持った、ということを書いた。

以下の人々は機械や商業、運輸といった、一見すると旧來型の産業に属する起業家だが、おそらく読者においては前節で筆者が指摘したいくつかのこと——産業の民主化、産業の工業化、産業としての意志——というものを読み取られるに違いない。

安井正義 (やすい・まよよし)

一九〇四年 (明治三十七) 愛知県に生まれ、小学校卒業と同時に家業のミシン修理業「安井ミシン商会」を手伝った。二十一歳のとき父親の死亡に伴って若くして店主となり、のち屋号を「安井ミシン兄弟商会」と改めた。

ミシンの国産化を目指し開発に取り組み、二八年麦藁帽

子縫製用ミシンの製品化に成功したのをきっかけに、兄弟を意味する英語「ブラザー」を商標とした。三四年「日本ミシン製造」を設立し専務、戦後に入って五〇年社長に就任した。

被服メーカーの勃興や家庭用ミシンの需要に乗って社業は発展の一途をたどり、国産ミシンの輸出や糸編機、家電などの生産に乗り出し、多角化を開始した。

なかでも、B I C ニューヨーク社の要請で六一年に発売した欧文タイプライターは、全米で注文が殺到し不動の地位を築いた。六二年、社名を「ブラザー工業株式会社」に改めた。九〇年没。享年八十六。

井深 大 (いぶか・まよおる)

一九〇八年 (明治四十二) 栃木県に生まれ、三歳のとき父親と死別した。貧困の中で苦学を重ね、三三年早稲田大理学工学部を卒業して写真化学研究所に入った。学生時代に「走るネオン」を発明し、パリ万国博覧会で優秀発明賞を受賞した。

ややあつて日本音光工業に移り、四〇年「日本測定器」設立と同時に常務に就任した。第二次大戦中は「光熱兵器」の開発に従事していた。現在は電子レンジに使われている特殊な電波の原理を使って、動植物のみを殺傷する殺人光

線兵器を作るよう、軍から命じられたのだ。このとき海軍技術中尉だった盛田昭夫と知り合った。

四五年十月、「東京通信研究所」を設立し、短波放送を聞くための変換器を製品化した。これが朝日新聞に報じられ、それを読んだ盛田が井深のもとを再び訪ねてきた。こうして技術の井深、営業の盛田というコンビによる「東京通信工業」が発足した。社長は井深の義父・前田多門だった。

五〇年、初めての磁気テープ式録音装置を開発、さらにトランジスタ・ラジオを製品化して一躍世界に知られ、五五年に東京証券取引所に株式を上場、五八年に社名を「ソニー」に改めた。

ソニーはラテン語の「SONUS」（音）に発音が近い英語「SONNY」（坊や）に由来するのだが、日本語的な発想では「損に」と読めてしまう。それでNを一つ抜いて「SONY」とした。七一年会長、七六年名誉会長。八六年勲一等旭日大綬章、八九年文化功労者に選ばれ、九二年文化勲章。九七年没、享年八十九。

榎尾忠雄（かしょ・ただお）

一九一七年高知県に生まれ、三四年早稲田工手学校機械科を出て、町工場の工員として三人の弟の面倒を見た。四

六年四月、東京・三鷹市に「榎尾製作所」を設立したが、当初は精密機械用の部品加工の下請けに過ぎなかった。指にはめてタバコを根元まで吸えるようにした「タバコリング」を考案して、夜道の露店で販売したりもした。

ここに三人の弟が入社し、「榎尾四兄弟」と称されるようになる。四人は相談して「新しい時代に対応した自社開発の製品を持ちたい」と考え、五〇年ごろから電気式計算機に取り組み始め、五四年十二月に試作第一号機を完成させた。

五七年六月、リレー素子を使った世界初の小型計算機「カシオ14—A型」を商品化した。それと同時に社名を「カシオ計算機」に改め、全国販売を開始した。

その後、電卓「カシオ mini」、デジタルウォッチ、電子楽器、ポケットテレビ、録画・再生一体型カメラなど画期的な製品を低価格で投入した。八八年、弟・和雄に社長の座を譲り、相設役となった。

山科直治（やました・なおはる）

一九一八年（大正七）石川県金沢に生まれ、三五年金沢商業学校を出て陸軍に応召した。華北戦線で負傷し四三年退役、日本電気冶金に入った。

戦後、繊維会社の玩具部門「萬代産業」に移った。東京

営業所長となり、五〇年暖簾別けのかたちで「萬代屋」を設立し玩具の製造を始めた。「リズムボール」と名づけた鈴入りビーチボールを発売したが、商品に欠陥があつて見事に失敗した。

この経験から徹底した検品制度を敷き、「品質第一主義」を唱え、玩具に品質保証制度を初めて導入した。ゼンマイで動くブリキ製の自動車やロボットを作り、これがヒットして輸出するまでに成長した。

人気少年漫画の主人公を玩具化するを思い立ち、初めてテレビキャラクターをモチーフにした「鉄腕アトム」を発売、六一年社名を「バンダイ」に改め初代社長に就任した。六二年に発売した「レーシングカーセット」は最初は地味な商品だったが、東京オリンピックを境に爆発的に売れ始め、以後、乗物系玩具と漫画キャラクター系が強みになった。

アイデアで勝負しただけに思われるが、実はこの人物が、プラスチックの射出成型装置を発明したことはあまり知られていない。それがプラスチック製キャラクター・グッズに結びついた。

八〇年社長の座を長男・誠に譲り、八四年私財四億円を投じて「日本おもちゃ図書館財団」を設立した。心身障害児におもちゃと親んでもらうのが目的だった。八七年会

長を退き、九七年没。享年七十九。

池田 実（いけだ・みのる）

一九二〇年（大正九）佐賀県に生まれ、四四年日大経済学部を卒業後、四九年に「双葉製作所」を設立した。当初はスクーターやオートバイのサドル、乗用車のシートを製造していたが、座席クッションの技術を応用して五六年にベットの製造に乗り出した。

折から日本人の生活様式が洋風を指向したこともあつて、畳の上でも使えるパイプフレームのベッドやソファ兼用の折りたたみ式ベッドが受け、同時に販売店をチェーン化して業績を伸ばした。

六一年に社名を「フランスベッド」に改め、アメリカやイギリスのメーカーと相次いで提携して木製・羽毛ベッドなど高級製品、医療用ベッドなどを生み出し、九一年には高齢者の在宅介護用ベッドなども考案した。日本ベッド工業会を創設し、会長を務め、九七年没。享年七十七。

高原慶一朗（たかはら・けいいちろう）

一九三一年（昭和六）愛媛県に生まれ、五三年大阪市立大学商学部を出て父親が経営する国光製紙に入社、専務となった。父親が敷いた既定のルールに乗っていることに反

発して六一年に独立、「大成化工」を設立した。

六三年女性用生理ナプキンを製品化し、薬局で売っていた「アンネ」に対しスーパーや雑貨店のルートを開拓して急成長した。七四年、社名を「ユニ・チャーム」に改め、研ナオコを起用したテレビ・コマーションで生理用ナプキンの陰気なイメージを払拭した。

核家族化と少子化、家庭における衛生意識の高まり、高齢化社会の到来などを早くに予測し、紙オムツを製品化してヒットさせ、売上げの五割以上に高めた。七六年に株式を上場し、韓国や台湾、中国などにも進出して、家庭用衛生紙製品でトップシェアを築いた。

塚本幸一（つかもと・こういち）

一九二〇年（大正九）滋賀県に生まれ、三八年八幡商業学校を卒業して陸軍に応召、第二次大戦のインパール作戦でからも生き残った。抑留を終えて四六年に復員し、京都市に洋品店「和江商事」を開業した。四九年、従業員十人で婦人向け洋装下着の生産販売を始め、五六年の第一次女性下着ブームで業績を大きく伸ばした。

五七年に社名を「ワコール」に改め、併せてタイムレコーダーを廃止して従業員の出勤を自由裁量に任せる経営で注目を集めた。八三年「京都服装文化研究財団」を創設

するかたわら、タイや中国、アメリカなどに進出してインナーからアウターまでの総合ファッション・メーカーへの転換を図った。八五年会長兼社長、八七年会長に退き、九〇年勲二等瑞宝章。九八年没。享年七十七。

三澤千代治（みさわ・ちよじ）

一九三八年（昭和十三）新潟県に生まれ、一九六〇年日本大学建築学科を卒業した。学生時代に結核を患い一年あまり入院した。その際、日本住宅の梁が建築の自由度を阻害していると考え、梁のない住宅のための木質パネル接着工法を編み出した。六七年、従業員四十七人で「株式会社ミサワホーム」を設立、五年後に個人住宅用プレハブメーカーのトップとなった。

工事現場の作業小屋というイメージがつきまとったプレハブ住宅の高付加価値化に努め、建売り住宅とは一味違った内装や照明器具を備えた規格住宅を製品化した。九〇年代には高度情報通信システムの普及を見越して規格パネルに通信回線を埋め込むなど、情報化に強い関心を持った。

八五年に導入した土日社員制度や「履歴書には失敗欄がほしい」などの発言で耳目を集めたが、プレカット方式によるツー・バイ・フォー工法や軽量鉄骨工法の自由設計対応、バブル崩壊後の経済環境の変化に追従できず、二〇〇

三年トヨタグループとなり代表者の座を降りた。

二

次の人々は、商品の売り方——独自の商品がどうであったより、売り方のユニークさ——で新しい産業のスタイルを生み出した。こういう企業が天下を取るということは、明治・大正にはまずあり得なかつた。これこそ第二次大戦後の日本を生き生きとさせた原動力だつた。

市村 清 (いちむら・きよし)

一九〇〇年 (明治三十三年) 佐賀県に生まれ、一九二一年中央大学法科を卒業して大東銀行に入った。のち吉村商店を創業して紫紺色陽画感光紙の販売で頭角を現わし、三三年、大河内正敏に認められて理化学興業に入った。三六年理化学興業から独立して「理研光学工業」を設立した。ここにちのリコーである。

終戦直後、東京・銀座四丁目角地を購入し、ここに「三愛商事」を設立して三愛石油、三愛計器、西銀座デパートなどを設立した。また経営が破綻した高野時計を買収してリコー時計と改め、腕時計や二眼レフ・カメラに参入した。六三年八月の日本リース設立に当たっては、その経営手

腕を高く買っていた経団連会長の石坂泰三が財界に声をかけ、またその門下から五島昇、盛田昭夫などが出た。

一九六五年オリンピック後の不況でリコーの経営が悪化するに再び陣頭指揮に立ち、カメラと時計に依存していた事業の抜本的な見直しを断行、アメリカ視察の折に見た卓上電子複写機を製品化して電子事務機の分野を開拓した。亡くなる直前に資財三十億円を投じて「新技術開発財団」を創設した。六八年十二月没。

森泰吉郎 (もり・たいきちろう)

一九〇四年 (明治三十七年) 東京都に生まれ、二八年東京帝国商科大学 (のち一橋大学) を出て京都高等蚕糸学校 (のち京都工芸繊維大学) 教授、四六年横浜市立大学教授、五四年同大学商学部長。

生家が東京都港区虎ノ門に貸し家を百軒ほど保有していた。それが戦災で焼け、跡地を再開発するため、定年を迎えた五九年「森ビル」を設立して不動産業に転進した。建てた順番でナンバを付けた貸しビルは、折からの産業復興、経済成長に乗って順調に数を増やし、総床面積で三菱地所、三井不動産に次ぐまでに成長した。

七六年、武蔵丘陵の丘と丘の間にあつて「谷町」と称された古い住宅街にあつた銭湯を買ひ上げ、ここに小規模な

オフィスビルを建てる計画だった。しかし日本企業の国際化と海外企業の参入が活発化することに着目して、三百余に細分化されていた宅地を根気強く買い上げていった。

八六年に総面積六・五ヘクタールの複合高層ビル「六本木アーケヒルズ」を建設した。当初、入居を期待していた日本IBMと賃貸料が折り合わなかった。そこにバンク・オブ・アメリカなど海外の大手金融機関が次々に入居し、「一流オフィスは大手町」という常識を覆した。

青井忠治（あおい・ちゅうじ）

一九〇四年（明治三十七）富山県に生まれ、二二年富山県立工芸学校（のち県立高岡工芸高校）を出て東京・新宿にあった月賦販売業「丸二」に勤め、三一年暖簾分けて東京・中野に「丸二商会」を設立、三七年社名を「丸井」に改めた。しかし第二次大戦で事業を閉鎖せざるを得なかった。

四六年家具の現金販売から営業を再開し、五〇年十二月に五か月払い方式の月賦販売事業を開始した。五五年には十か月払い方式に変更、「十か月払いの丸井」として急成長をとげた。六〇年国内初のクレジット・カードを発行し、月賦販売会社からクレジット会社への脱皮をはかった。

六二年新宿店をオープン、六三年に東証第二部に株式を

上場した。テレビCM「駅のソバ」「世界の高級品」キャンペーンにより企業イメージの向上に努めた。六六年に業界で初めてコンピュータを導入してクレジット・システムの高度化を進め、店舗数の拡大を推進した。七五年没。享年七十一。

田口利八（たぐち・りはち）

一九〇七年（明治四十）長野県に生まれ、陸軍忠召で戦車隊に配属された。日本陸軍の戦車は防御用の装甲が薄く、射程距離が短かった。ために一度戦闘になれば特攻隊と同じように生きて帰れないといわれたが無事に退役し、このときトラックの機動力に着目した。

三〇年二月岐阜県益田郡萩原町で中古トラック一台の「田口自動車」を創業、三三年大垣市に移って運送業を開業した。四一年トラック二十台で社名を「西濃トラック運輸」と改めたが戦時下の陸運統制令で集約合同となった。

四六年「水都産業」を起し四八年社名を「西濃トラック運輸」に戻したのち、五五年「西濃運輸」に商号を変更した。戦後の混乱期、道路事情や燃料不足から難しいとされた長距離輸送に取り組み、四八年大垣―名古屋間の路線免許を、さらに名古屋―東京間、大垣―大阪間の路線免許も取得し、東京―大阪間の産業動脈を結ぶ路線トラックの

先駆けとなった。七一年名古屋証券取引所二部、七二年東京証券取引所一部に上場し、八一年会長に退いた。八二年没。享年七十五。

鈴木清一（すずき・せいいち）

一九一一年（明治四十四）愛知県に生まれ、二九年東京中央商業学校を出て蠟問屋に勤めた。三一年肋膜炎の闘病生活を送る中で金光教に入信し、三八年「一燈会」に参加した。

四四年「ケントク」を設立し、戦後に至ってワックスの製造販売を始めた。六二年にアメリカのワックス・家庭用衛生品関連メーカー最大手であるジョンソン&ジョンソン社との提携に失敗して会長を辞任した。

すでに五十歳を超えていたことから多くは再起不能と見したが、六五年化学ぞうきんレンタル会社「ダスキン」を創立し、フランチャイズ方式を採用して急成長した。のちフランチャイズ制のノウハウを生かして「ミスタードナツ」を設立し、ファストフードの外食産業市場を開拓した。八〇年没。享年六十八。

水島廣雄（みずしま・ひろお）

一九二二年（大正一）京都府に生まれ、一九三六年中央

大学法学部を卒業して日本興業銀行に入った。中小工業部次長、特別調査室付考査役などを経て、一九五八年、経営が傾いていた百貨店「十合」に招かれて副社長に就任した。「十合」は一八八七年に大阪・心斎橋筋に開業した「十合呉服店」にさかのぼる老舗で、東京にも進出していたが、急速な都市化に伴う消費者ニーズの多様化に対応できなかつた。

水島は大胆な人員整理を行う一方、社名にちなんで「十店舗展開計画」を策定、これを機に社名を「そごう」に改め、地域一番店主義、現地法人主義を導入した。一九八五年グループ売上高一兆円を達成し、百貨店業界のトップに躍進、その余勢を駆って横浜に国内最大級の「横浜そごう」を開店した。

一九九四年、四十店目となる「広島そごう」の開業直後に経営危機が表面化し、水島は会長を辞任したが、のち経営責任と利益隠しの罪を問われ、二〇〇〇年に逮捕、起訴されるに至った。同年、社名を創業時の「十合」に改めるとき、四十年に及ぶ水島体制に幕が下ろされた。

吉原信之（よしはら・のぶゆき）

一九一六年（大正五）東京に生まれ、三七年早稲田大学専門部を出て石油会社に入った。四三年独立して「三陽商

会」を設立、レインコートの製造販売を始めた。

雨が多い国であるにもかかわらず、この国ではファッション化されたレインコートというものが存在しなかった。あったのは蓑と雨合羽、ないしビニール製のカッパであった。ただし江戸期の雨合羽には、高価な羽二重を使った瀟洒なものも存在した。しかしいかんせん洋風の生活に馴染まなかった。

戦後、百貨店が扱うようになったことで売上げが急伸び、六五年イギリスのバーバリー社と提携して国内で「バーバリー」ブランドの製品を生産した。

「S A N Y O」ブランド製品の輸出に力を入れ、併せて婦人服にも参入、総合アパレル・メーカーへの転換を図った。八三年会長となり、「最後の江戸っ子」と呼ばれ、偉ぶらない態度が人望を集めた。

三

小倉昌男 (おくら・まさお)

一九二四年(大正十三) 東京都に生まれ、四七年東大経済学部を出て父親が営んでいた大和運輸に入った。五一年、日本を離れるG H Q総司令官マッカーサーの家財道具一式を運送したことから一躍信用が高まった。

七一年社長に就任すると、それまでトラック運送会社が扱わなかった小口輸送、特に一般家庭を相手にした小荷物輸送に進出、七六年「クロネコヤマトの宅急便」をスタートさせた。

戦前から取引があった最大顧客の三越との関係がこじれ契約解消となり、当初は赤字だったが、酒類販売業者と提携して取次を開始、八〇年コンピュータを利用した宅配便管理システムを編み出した。

国鉄や日本通運の小荷物輸送、郵便小包などと競合することになり、陸運局による路線許認可の嫌がらせなどがあったがそれに屈せず、「運輸省なんかいらぬ」の名言を吐いた。家庭から家庭まで翌日配達、取扱い荷物の破損保証、輸送運賃の値下げなどで急伸びし、運送業を「トラックを使ったサービス業」に転換した。タクハイの元祖である。

飯田 亮 (いいた・まこと)

一九三三年(昭和八) 東京日本橋に生まれ、五六年学習院大学政経学部を出て父親が営んでいた酒類問屋「岡永」に入った。六二年父親の反対を押し切って大学の同窓生である戸田寿一と「日本警備保障」を創業、社長に就任した。六四年東京オリンピックの選手村の警備を担当し、翌六年TBSテレビ「ザ・ガードマン」で警備保障会社の認

知が高まるのに伴い急成長した。

六六年、早大紛争における警備の依頼を「警備員は厳正中立であるべき」とする社是に基づいて断つた一方、人手による機械警備システム「SPアラーム」を開発、要員派遣と機械警備を組み合わせるメリットを提唱した。

七五年コンピュータとアラームシステムを通信回線で結ぶ「コンピュータ・セキュリティ・システム」(CSS)を開発した。九七年会長を退任、取締役最高顧問に就任した。

本庄正則 (ほんじょう・まさのり)

一九三四年(昭和九)兵庫県神戸で生まれ、五九年早稲田大学第一法学部を出て「東都日産モーター」のセールスマンとなった。六四年「日本ファミリースービス」を設立し専務となった。

六六年、実弟・八郎とともに静岡市に緑茶製造販売の「フロンティア製茶」を設立し専務に就任し、六九年社名を「伊藤園」に変更した。

七九年日本で初めて中華人民共和国と「ウーロン茶」の輸入代理店契約を結び「ウーロン茶リーフ」を全国に広めた。八一年世界初の「缶入りウーロン茶」の開発に成功、それまで存在しなかった無糖飲料マーケットを創出した。

また八五年には技術的に不可能とされた「缶入り緑茶」の製品化に成功、無糖茶飲料市場を開拓した。

「お〜いお茶」「充実野菜」などのテレビ・コマーションで次々にヒット商品を出し、一代で伊藤園を一千億円企業に育て上げた。東京商工会議所副会頭、日本商工会議所特別顧問、在東京ペルー共和国名誉領事、在横浜スリランカ民主社会主義共和国名誉総領事などを務め、二〇〇二年没。享年六十八。

以上の三人に共通するのは、それまで存在していなかったか、存在していてもビジネスになり得なかった領域を開拓したことである。

宅配便は郵便、鉄道貨物の厚い壁があり、警備は警察、消防の公務を侵害すると目された。日常の暮らしてお茶を買う、などということは、長距離の列車旅行の際の駅弁以外ではあり得なかった。それこそ「無から有を生んだ」のである。情報サービス産業の黎明期を担った人々はこの延長線上に位置している。

~~~~~ 補注 ~~~~~

盛田昭夫 もりた・あきお／1921～1999。愛知県に生まれ四四年大阪大学物理学科を出て海軍に入った。見習技術尉官のち中尉となり、横須賀海軍航空技術廠担当将校として赴任したとき井深大と知り合った。四六年井深とともに東京通信工業を設立し常務となり、トランジスタラジオの輸出に当たって「SONY」のブランドを生み出した。五九年副社長をへて七一年社長、七六年会長。八六年に最若年で経団連副会長となった。主著に『学歴無用論』『NOといえる日本』などがある。

三人の弟 概尾俊雄(かしお・としお／1925～2012)、和雄(かしお・かずお／1929～2018)、幸雄(かしお・ゆきお／1930)。俊雄が技術部門を、和雄は営業部門を、幸雄は製造部門をそれぞれ担当し、こんにちのカシオ計算機を創った。萬代屋の社名 古代中国の兵法書「六韜」にある「萬代不易」に由来している。永久に不変の意味。原文は「萬代不易、五行之神道之常也」。

国光製紙 本社は愛媛県川之江市川之江町八三四。ユニ・チャーム・グループに入っている。ダシ取り用の紙製品などユニークな製品を企画・生産している。

アンネ 日本で最初に発売された使い捨て生理用品の名前で、それを考案した二十七歳の女性が『アンネの日記』(アンネ・フランク)に共感して命名した。アンネ社が生産・販売したが、のちにライオンに吸収された。

プレカット方式 設計図面に基づいて工場です前に木材部材を加

工し現場で組み立てる。木材の加工・組み立てが天候に左右されず現場作業が短縮され、かつ施主の希望に沿った住宅が可能になる。CAD(コンピュータ利用による設計)／CAM(コンピュータ利用による製造) 技術が背景にある。

紫紺色陽画感光紙 一九一七年(大正六)に設立された財団法人・理化学研究所が二七年に発明した。それまでの青写真は青地に白線の陰画だったが、この感光紙は白地に青い線の陽画で世界五か国で特許を取った。二九年に商品化され、研究成果を事業化するために第三代所長・大河内正敏が設立した理化学興業から「理研陽画感光紙」の名で発売された。

大河内正敏 おおこうち・まさとし／1878～1952。東京に生まれ一九〇三年(明治三十六)東京帝国大学工学部を出て一四年同大助教、二一年から二五年間にわたって理化学研究所の所長を務めた。三八年子爵に叙せられ四五年戦犯容疑で逮捕のち釈放となった。「資源持たざる国もし科学あれば、持たざる国に非ずして持てる国である」とする科学主義工業の思想を確立した。日本リース 日本で最初のリース会社。市村は設備機器の賃貸サービスが企業の経営合理化や事業拡大に寄与すると信じ、アメリカの「C社」と提携して日本リース・インターナショナル社(当時)を設立した。原則無担保、リース料は固定という条件で、「使用すれども保有せず」という新しいビジネスモデルを確立した。日本経済の発展に伴って事業領域は一般事務機や生産設備、運送機器、医療機器などに広がったが、バブル経済崩壊後の一九九八年、筆頭株主の日本長期信用銀行が経営破綻し、それに伴い一九九七年セネラル・エレクトリック・グループに入った。二〇〇一年に社名を「GEキャピタルリーシング」に変更している。

陸運統制令による集約合同 一九三八年時点で運送業認可取得事業者は全国に七千九百五十三だった。対米英開戦を前にした四一年八月交通政策要綱と高度国防国家体制基本方針に基づく陸運統制令が発動され、中小運送業の集約合同が行われた。このとき「公益的運営による重要物資輸送確保」(兵士と軍事物資の輸送)を目的に発足したのが日本通運である。当時のトラック輸送は鉄道による貨物輸送に対する補助的な役割と認識され、かつ石油消費を国家統制で抑制するねらいがあった。

ザ・ガードマン 大映が制作し東京放送(TBS)系列で一九六五年四月九日の第一回から七一年十二月二十四日の最終回まで計三百五十回放送された。武器を持たず企業の依頼を受けて警備を行うガードマンたちが、さまざまな事件に巻き込まれ独自の推理とチームワークで解決していくストーリーだった。宇津井健、藤巻潤、神山繁、倉石功、中条静夫、稲葉義男、川津祐介、清水将夫らがレギュラー出演し、最高視聴率四一%の人気番組だった。

# 日本IT書紀 134 産業の意志

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会  
<http://www.ossaj.org/>  
[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。